



TITLE:

<大會抄録>中國近代における商會 制度の特質について：兩大戰間期河 南の商會を中心として

AUTHOR(S):

陳, 來幸

CITATION:

陳, 來幸. <大會抄録>中國近代における商會制度の特質について：兩大戰間期河南の商會を中心として. 東洋史研究 2000, 59(3): 502-503

ISSUE DATE:

2000-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155347>

RIGHT:

『蒙古源流』と他のモンゴル年代記との
關係について

森川 哲雄

『蒙古源流』は一七世紀後半に編纂されたモンゴル年代記の一つである。きわめて豊富な内容を持ち、とりわけ明代から清代にかけてのモンゴル史研究の重要な史料となっていることは周知の通りである。『蒙古源流』についてはすでに多方面から多くの研究が行われているが、まだまだ不明な點が多い。その一つはサガン・セチェン自身が利用した史料をめぐる問題である。モンゴル年代記には珍しく彼は七つの史料の名前を明記しているが、これら彼が利用した史料が現存する史料のどれに當たるかについて、すでに多くの研究がなされ、一部は解明されている。しかしながら一部については大きな誤解もあるようである。他方『蒙古源流』はその後に編纂されたモンゴル年代記の編纂にも大きな影響を與えている。本報告ではこの點について『蒙古源流』が『アルタン・トブチ』、『シラ・トゥージ』や『チンギス・ハーンのアルタン・トブチ』、『アサラクチ史』その他のモンゴル年代記とどのような關係にあるのかについて検討し、モンゴル年代記の史料の價値の問題にもふれてみたい。

中國近代における商會制度の特質について

——兩大戰間期華南の商會を中心として——

陳 來 幸

近年商會研究は相當な進展を見ているが、こと華南地區の研究は僅少で、國民政府以降の時期に言及した研究も少ない。本報告では廣州總商會が廣州市商會へと變貌を遂げた経緯を跡付けたうえで、國民政府と市商會との關係および華南地區の商會の特徵について分析する。

北伐の起點であつた廣東はもともと早く國民黨の「商民運動」の洗禮を受け、商人組織は廣東政府と國民黨の方針に終始左右され續けた。ここで誕生した「商民協會」は北伐の進展とともに、新しい商人團體（市商會）へと統合される一方、「革命的商民」の精神は國產品の奨励とその愛用運動の方向へと繼承された。一九二八年と三〇年代初期の廣州總（市）商會の會議録と收支記録によつてこの時期の總商會の機能を點檢する。

一方、東北、華北、長江下流地區との比較において、海外華僑との窓口機關として機能したことを、華南地域の商會の特色として指摘したい。清朝末期、華僑送出機關として廈門に設けられた「保商局」は、厦門商務總會の設立の際にその中に組み入れられた経緯がある。廣州總商會自身の會務報告も、この點を自商會の特徵としている。商事公斷（仲裁）、調査・勸業、など各地商會共通の役割と並び、華僑と僑郷との間の安定的なチャンネル構築體制への支援と

いう重要な役割をも擔っていた。

近代の宗譜から見た宗族の軌跡

——廣東の冼氏を對象として——

井 上 徹

宋代に開始されたところの、官界と永續的な關係を保つような名門の家系を樹立する裝置としての宗族集團を形成しようとする動きは、一六世紀以降、華中・華南の都市を中心として發展を遂げ、地域社會に定着していった。宗族は、その普及のプロセスにおいて、宗族結合の核心をなす父系血統の觀念と祖先祭祀の浸透とともに、人々の生産と生活を防衛する相互扶助團體としての性格を加え、その存在自體が廣義化した。宗族が最もその威力を發揮したのは、「西洋の衝擊」に直面した一九世紀半ば以降の近代化の過程においてである。本発表の眼目は、中國で最も早くに近代化に直面した廣東の冼氏が編んだ宗譜の分析を通して、近代化に對する宗族の對應を検討することにある。

冼氏の一族は廣州・肇慶兩府に廣く分派していたが、各地の冼氏は、明代後半以降、それぞれの血縁關係を強めるとともに、明末清初には、兩府の冼氏を大統合する事業を廣州城で舉行した。この大統合に至る冼氏諸房の浮上の軌跡と宗族の普及の潮流との關係、また清代における諸房と大統合との關係を検討することが第一の課題である。第二に、近代化への對應である。アヘン戦争の前後から、

傳統的な産業・流通構造の變質にともなう失業者の増大、農業經營の不振、會黨の活動の活潑化など、秩序不安が飛躍的に増大した。こうした秩序不安に對して、冼氏は各地の諸房内部における宗族結合と大統合の強化によって、族人の生産と生活を保全しようとした。その間の事情を探ることによって、近代化と宗族との關係を考察したい。

漢代の墳墓祭祀畫像における門闕像と亭長像

佐 竹 靖 彦

漢代の畫像石、畫像磚、墓室壁畫には多くの亭長の像あるいは亭長の像と想像されている像が含まれており、門闕とりわけ雙闕の傍に立つ主として啓戟等をもつ武官の像をそれにあてる聞有氏の説、門闕とその門衛の像を西王母の世界の入口を示すとする曾布川氏の説、漢代の都亭は「國立の旅館、つまり旅行中の臨時の宿泊所であり」、祠堂畫像に見える都亭は、墓主が地下の墓室から車馬にのり現世に來た時の臨時の宿泊所であるとする信立祥氏の説が並立している。問題が墳墓祭祀畫像の理解にかかわる以上、その畫像學的理理解が最重要であるのは論を待たないが、本論では畫像による祭祀がより大きな祭祀の體系の一部であるとして、石棺、石槨、墓室、石闕、石造祠堂、あるいは現在はずでに失われてしまった大規模な木造宗廟、木造寢殿等に描かれていたはずの畫像を墳墓祭祀畫像の概念によって總體的に認識することにより、この問題の解決に迫ろう